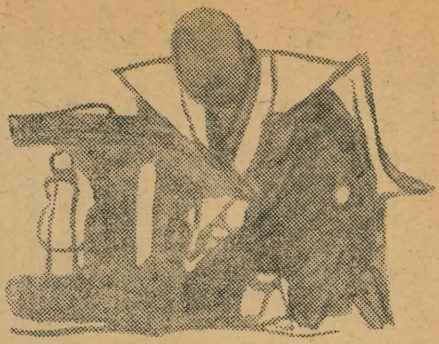

「太功記」ひとり判斷

＝六月の文樂座に因みて＝

木谷蓬吟

時流に乘り上げた人氣淨瑠璃の中でも、最も多く一口淨瑠璃にうたはれたものは「太功記」であらう、この點、忠臣藏も菅原も千本櫻も、はるかに及ばない。「これ見給へ光秀殿……」や「主を殺した天罰の……」など、愉快なコーラスは家庭に街に、百五十年來汎濫の波を斷たない。昔から板行された多くの流行淨瑠璃番付を見ても、太功記は必ずその大關または横綱の位置を占領してゐる。なぜそんなに流行兒として持て囃されたかといふことは後に叙べるが、まづ太功記のアウトラインを一見しやう。

「繪本太功記」の淨瑠璃は、寛政十一年七月の道頓堀若太夫芝居で初演、今六月文樂での上演は偶然にも、まさしく百五十年目に當つてゐる。作者は若年ながら腕の利いた近松やなぎを主體にして、同湖水軒、千葉軒との合作であるが、その原據は、大阪版畫史上の推進力となつた法橋岡田玉山（月岡雪鼎の門）の著「繪本太閤記」に由つてゐる。ついでに云ふと、もと〳〵これは豊臣秀次に仕へた小瀬甫庵の眞書太閤記を抄略したものであるが、一說には大阪長町の大旅籠屋分銅河内屋の主人で粹人の名の高い河四郎の構想を儒者竹内確斉が筆にしたものだといふ。

全篇十四段の長篇、文樂興行にも從來の例によれば、光秀を中心にした五六段だけを上演してゐる。それは、「發端」安土城蘇鐵の意見（これは多くの場合削除される）「六月朔日の段」二條城饗應鐵扇並に光秀館（この二場が鶴屋南北脚色の「馬盥の光秀」）「六月二日の段」本能寺、「六月六日の段」妙心寺「六月九日の段」大物浦瓜献上、「六月十日の段」尼ヶ崎謂ゆる十段目である。中にも、尼ヶ崎の最大性根場であることは云ふまでもないが、短篇で引きしまつて無駄のない佳作の妙心寺は十段目に劣らぬ逸品だと、私は愛好してゐる、作者やなぎの出色人物光秀の性格描寫が、この一段に特に優れて見えるからである。

作者近松柳は半二の末弟子で二流どころの人だが、日吉丸や賢女鑑の佳作もある、太功記はその代表作であるが、世間に流行の十段目だけは却て光秀の人物に誤解が生れる恐れがあるが、妙心寺や二條寺など全篇を通じて見ると、主人公光秀が素晴らしく巧く描けてゐることがわかる。暴君春長に大侮辱を與へられ、積憤發して本能寺の變を生ん

だも無理でなく、妙心寺で母に痛戒されて自決しやうとしたのも孝子らしくて同情できる。それが股肱の臣四王天の切諫に引きづられて心境再轉、心ならずも逆賊の汚名を甘受しながら死んで行くといふ、西郷隆盛に似たやうな運命的な人間の姿が、シンミリと巧描されてゐる。作者は意あつて書いたかどうかは判らぬが、この寂しい捨身の光秀の影畫像を舞臺化する藝能人が一人ぐらゐはあつてもよいのではないか。

この光秀を專ら逆賊だの不忠不義の代表のやうに喧傳されたのは、太功記を通し狂言がめつたに出ないのと、十段目の「主を殺した天罰」の一聲天を貫く破天荒の節まはしに魅了された爲であらうか。

前にも云ふた十段目の流行は、決して作品の優れた故でない、これを初演の麓太夫が、九十三才まで衰へなかつた天禀の美聲を驅使して、旺んに華やかな節章を用ひた爲に、俗耳に入ること快活に、口眞似するに面白く、更に麓太夫の語り口のスケールの大きさに聽衆皆吸ひ込まれて陶醉したものと思へる。彼は天與の美音にまかせて、いかな三段目物も同格物も派手に〳〵と語つてのけた。恐らく元祖義太夫の青年時の信條とした「花七分實三分」に準じてこれを己がモットーとしたものらしい。

麓太夫が初演の時、妻子にまづ語つて聞かせてテストした逸話は既に本誌にも述べたが、その後、巴太夫重太夫大住太夫氏太夫若太夫三光斉なども勤めたが、嶄然三世長門太夫には壓せられた、明治五年一月松島文樂座新開業に上演の時は十段目が櫓下の春太夫、光秀を淨瑠璃史上唯一の人形櫓下吉田玉造が力演、五十三日の大入を占めたのが近代の記錄的十段目である。爾來越路太夫(後の攝津大掾)も美音で前半は無類との好評を受けたが光秀の後段は未だしと云はれた。明治末年から私の聞いたは、組太夫大隅太夫後の越路太夫法善寺津太夫先頃歿去の津太夫伊達太夫(土佐太夫)と山城少掾等であるが、各一長一短あつて優劣は定められぬが、私の印象には後の越路太夫のが全體として秀作だと覺えてゐる。中にも初菊や重次郎を誇張して初々しく語るもあれば、母のさつきを思ひ切り手强く演じるのも一と見識だと思はれる、光秀の出にも各人各說の工夫があつて、味ふにも力が入る、登場人物にも武將あり智將あり勇將あり、若武者あり娘あり女房あり老女がある、淨瑠璃人形類型の總てを含むだけに、演技者の長所短所も推測するに興味が深い、後進者の競技的演目にも好適のものだと思ふ。

終りに、いさゝか嫌味に當るかも知れぬが、私の自慢話を添へさせて貰ふ。それは從來不明であつた「太功記」の作者近松やなぎの墓を偶然にも發見したことである。

昭和十年九月廿八日、生玉神社東門南へ一丁の銀山寺へ、これも先年發見した「心中宵庚申」のお千代半兵衞並に胎兒の土葬墳墓のことで訪ふた時、何の氣なしにフラリと南隣りの大寶寺へ足を入れると、掲示板が目についた、

「無縁墓の整理に付き本月中に申出なければ適當に處置する」との意が公告されてゐた。期限は明後三十日で無届墳墓は永久に闇に葬られるのである。多年探墓に足を棒にした經驗上、無常觀を起しながら掲示板の横の墓道を何氣なく二三歩行くと、目に止つた赤紙貼りの無縁墓候補の一つに、近松やなぎの小さな碑面の文字が讀まれた、近寄つて見ると碑面に「近松やなぎ法名」と小さな文字の肩書があつて「柳巖泰敬信士」とあつたので、夢かとばかり驚歎した。住職に會ふて過去帖を調べると、享和三年正月三日病死、四十一才、俗名錺屋久兵衞とまで知れた。早速松竹に電話すると白井會長も歓んでくれた、それに奇妙な事は、現在文樂では「太功記」が上演、檜下の津太夫が十段目を勤めてゐるので、一座總動員で參詣するやら大施餓鬼を行ふやら、墓は松竹の手で永久供養といふことに決定、これで近松柳も無縁沈落の三日前に危くも助かつたのは奇妙で、しかも太功記上演中の出來事であることも嘘のやうな事實である。某夕刊紙に「近松柳の墓蓬吟を招き寄せる」などからかはれたものである。この前年には竹田出雲始め一族六十餘人の群墓を發見、續いて二世太夫の政太夫と竹本播磨少掾の墓を探し當てた事があり、毎日紙の薄田泣菫氏の茶話にも「墓成金」と書かれたが、ここに太功記作者の墓を發見していよ〳〵墓成金の面目を全ふしたのは愉快であつた。

× × ×

六月の文樂座興行

第一部＝「繪本太功記」配膳（隅若、司、錦糸ら）本能寺（織部、七五三、つばめ、廣助、友衛門ら）妙心寺（越名、勝太郎、相生、清二郎）夕顔棚（松、綱造）尼ヶ崎（呂、松之輔、綱、彌七）人形＝光秀（玉助）さつき（文五郎）操（紋十郎）初菊（紋司）重次郎（龜松）久吉（光造）

第二部＝「壽式三番叟」（呂、綱、大隅、源、錦、七五三、つばめ、清八、彌七、松之輔ら）人形＝千歳（光造）翁（玉市）三番叟（紋十郎、紋司）「義經千本櫻」＝椎の木（富叶太郎、住、吉兵衞）小金吾討死（伊達、喜左衞門）鮓屋（山城少掾、清六）人形＝權太（玉助）小金吾（紋十郎）お里（文五郎）「道行初音旅」＝（源、錦、濱、寛治郎ら）人形＝靜（龜松）忠信（光造）